

修士論文（要旨）

2017年1月

青年期の自己愛傾向と依存性および自己対象体験との関連

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
215J4008
鈴木 彩加

Master's Thesis (Abstract)

January 2017

Narcissistic Personality Adolescence and Its Relationship
to Dependence and Self object Experiences

Ayaka Suzuki

215J4008

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第 1 章	問題の背景と所在	1
第 2 章	本研究の目的	1
第 3 章	研究方法	1
第 4 章	結果および考察	2

引用文献

第 1 章 問題の背景と所在

青年期は自己愛傾向が高まると考えられており、小塩(2004)は自己愛の高まりから回復する過程において、対人関係の要因を考慮することが重要であると述べている。また、自己愛を検討する際には自己愛傾向を「誇大型」と「過敏型」の 2 類型から捉える視点が隆盛になっている(神谷・岡本, 2010)。青年期の対人関係をとらえる観点のひとつとして依存が挙げられる(長尾・笠井・鈴木, 2005)。上地(2011)は自己愛傾向と依存性の関連を検討する重要性を指摘しているが、これまで自己愛と依存性の関連を検討している先行研究は少なく(松並, 2013, 2014; 長沼・落合・落合, 2000; 小塩, 1996; 玉瀬・相原, 2005), 自己愛傾向の 2 類型に注目して、それらの傾向が依存性とどのように関連があるのかを検討することは重要なテーマであると考えられる。また、自己愛と依存はそれぞれ未熟なものから成熟したものへと発達していくと考えられてきており(Kohut, 1971, 1977, 1984, 関, 1982), 桑原(2002)は、発達という視点から自己愛を検討する際に不可欠な視点として「自己対象体験(self-object experiences)」という概念をあげている。このことから、発達の視点から自己愛傾向や依存性を検討するために自己対象体験との関連を検討することは重要であると考えられる。自己対象体験とは「特定の人物や対象, 象徴との関係性によって生じる主観的体験」と定義されており、個人は生涯、自己対象の支持的な反応を必要としている(Kohut, 1971, 1977, 1984)。また、白井(2005)は、過去に持たれてきた自己対象体験の蓄積や不全については、一般的な他者に対する現在の態度から類推する事が有効だと述べており、小林(2006)は、自己対象体験については対象を「人」に限定せず、その多様性を考慮することによって検討することが重要であると指摘している。したがって、発達とともに成長していくと考えられている自己愛傾向と依存性が、これまでに経験してきたさまざまな対象との自己対象体験の蓄積や不全とどのように関連しているかを明らかにしていくことは、有意義なテーマであると考えられる。

第 2 章 本研究の目的

本研究では、青年期に高まる自己愛傾向の特徴として誇大的側面および過敏的側面に着目し、それら 2 つの自己愛傾向と依存性および過去から現在における自己対象体験の蓄積や不全とどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。

第 3 章 研究方法

2016 年 7 月から 8 月の期間、関東圏内の大学に通う男女 18 歳から 24 歳の大学生を対象とし、質問紙調査を実施した。なお、質問紙は、調査の留意点、回答方法、倫理的配慮を記載した表紙、依存性の測定として「依存性尺度(関, 1982)」, 自己対象体験の測定として「自己対象体験尺度(小林, 2006)」, 自己愛傾向の誇大的側面と過敏的側面を測定するために「自己愛人格目録短縮版(小塩, 1998; 以下, NPI-S とする)」と「自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2005; 以下, NVS 短縮版とする)」の 2 つの尺度をシャッフルした「自己愛シャッフル尺度」, 対象者の属性(性別, 年齢, 学年)を問うフェイスシートから構成されている。

分析には SPSSver23.0 を使用し、各尺度の因子構造を確認するために因子分析を行った後、性差を検討するために t 検討を、また、各尺度間の相関を求めるために相関分析を行った。そのうえで、自己愛シャッフル尺度を用いて調査対象者を 4 群に分け、各群における依存性および自己対象体験の特徴を検討するために、性別と自己愛 4 群を独立変数、依存性尺度および自己対象体験尺度を目的変数とした 2 要因 8 水準の分散分析を行った。

第4章 結果および考察

711名に質問紙を配布したうち、回収が517名(回収率72.71%)であり、非回答、多重回答、一部欠損などを除いた最終的な分析対象者は397名(有効回答率76.79%)であった。その内訳は、男性135名、女性262名、平均年齢は、20.11($SD=1.14$)歳であった。

自己愛シャッフル尺度を因子分析したところ、因子負荷量が.40に満たない11項目を削除し、最終的には、他者の感情や反応に鈍感で周囲を気にかけない誇大性の自己愛を表している「誇大型自己愛(19項目)」と、他者の言動や反応に敏感で、批判や軽視に傷つきやすいタイプの自己愛を表している「過敏型自己愛(20項目)」の2因子が抽出された。また、性差を検討した結果、過敏型自己愛のみ、女性の方が有意に高い得点であった。依存性尺度は、「依存拒否(12項目)」「依存欲求(9項目)」「統合された依存(7項目)」の3因子が抽出された。自己対象体験尺度は、「鏡映自己対象体験(12項目)」「理想化自己対象体験(3項目)」の3因子が抽出された。また、性差を検討した結果、依存欲求、統合された依存、鏡映自己対象体験、理想化自己対象体験において、女性の方が有意に高い得点であった。

相関分析の結果、男女ともに「誇大型自己愛」と依存性および自己対象体験の間に相関は認められなかった。一方、「過敏型自己愛」においては、男女ともに「依存欲求」との間に有意な強い正の相関が認められた(男性: $r=.65$, $p<.01$ 女性: $r=.64$, $p<.01$)。このことから、男女ともに過敏型自己愛が高い者は、自己評価を維持したり、自己愛の傷つきを独りで抱えたりするために、他者からの配慮や援助を求める依存欲求を持つことが示唆された。自己愛の下位尺度得点平均値(誇大型自己愛 2.55($SD=0.63$), 過敏型自己愛 3.28($SD=0.64$))を基準とし、「誇大型自己愛」「過敏型自己愛」について、高・高群(混合型124名)、高・低群(誇大型83名)、低・高群(過敏型89名)、低・低群(低自己愛群101名)の4群に分け、分散分析を行ったところ、依存性および自己対象体験について自己愛4群と性別による交互作用は認められなかった。自己愛4群による主効果は「依存欲求($F(3, 389)=34.93$, $p<.001$)」「統合された依存($F(3, 389)=4.31$, $p<.01$)」「鏡映自己対象体験($F(3, 389)=2.90$, $p<.05$)」「理想化自己対象体験($F(3, 389)=2.87$, $p<.05$)」で認められた。多重比較の結果、「依存欲求」では誇大型・低自己愛群よりも過敏型・混合型の方が、「統合された依存」では低自己愛群よりも過敏型の方が、「理想化自己対象体験」では低自己愛群よりも過敏型・混合型の方が有意に高い得点であった。また、「鏡映自己対象体験」では低自己愛群よりも過敏型・混合型の方が有意に高い得点の傾向があることが認められた。

誇大型は、一般的に適応的と考えられる群であり、他者からの評価を気にせずとも自己価値を維持できるため、肯定的な反応を他者に求める依存欲求が低くなることが示唆された。過敏型は、自己価値を維持するために特定の対象から肯定的な反応や安心感を得て、目標や理想となるような自己対象を必要とし、そのような対象と融合することによって自己価値を維持している可能性が示唆された。混合型は過敏型のように、自己価値を維持するために、肯定的な反応を他者に求め、目標や理想となる自己対象を必要としている可能性が示唆されたが、そのような対象は過敏型のように限定的な対象との間で行われているわけではないことが示唆された。また、低自己愛群は理想化自己対象体験が少なく、青年期における第二の分離固体化の時期に、親からの脱理想化が行えていない可能性が示唆された。本研究によって、特に過敏型は対人関係で特定の他者に依存欲求を向ける傾向や他者を理想化するような自己対象体験をもっていることが明らかとなった。今後は依存対象を限定し、質的な自己対象体験に着目して、過敏型についてより詳細な検討が必要であると考えられる。

引用文献

- 上地 雄一郎・宮下 一博(2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, 14(1), 80-91.
- 上地 雄一郎・宮下 一博(2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 上地 雄一郎(著)(2011). 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係. 小塩 真司・川崎 直樹(編著). 金子書房
- 神谷 真由美・岡本 裕子(2010). 青年期の自己愛的脆弱性に関する研究の動向と展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 59, 137-143.
- 桑原 晴子(2002). 自己愛についての一考察——自己対象体験の視点から——. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 271-283.
- 小林 卓也(2006). 自己対象体験の因子構造——心理的な支えという視点から——. 福祉心理学研究, 3(1), 64-71.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.
(コフート, H. 水野 信義・笠原 嘉(監訳)(1994). 自己の分析. みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press.
(Press. コフート, H. 本城 秀次・笠原 嘉(監訳)(1995a). 自己の修復. みすず書房)
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* The University of Chicago Press.
(コフート, H. 本城 秀次・笠原 嘉(監訳)(1995b). 自己の治癒. みすず書房)
- 松並 知子(2013). 自己愛に関する研究の概観——ナルシシズムとセルフラブ, および, 質的な性差に焦点を当てて——. 四天王寺大学紀要, 56, 1-21.
- 松並 知子(2014). 自己愛の病理性の性差——他者への依存と自己誇大化. パーソナリティ研究, 22(3), 239-251.
- 長尾 あゆみ・笹井 仁・鈴木 伸一(2003). 青年期の親子関係と友人への依存性に関する研究. 広島大学院心理臨床教育センター概要, 2, 22-35.
- 小塩 真司(1996). 自己愛的性格傾向と依存性——青年男子を対象として——. 日本教育心理学会総会発表論文集, 38, 215.
- 小塩 真司(1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連. 教育心理学研究, 46, 280-290
- 小塩 真司(2004). 自己愛の青年心理学. ナカニシヤ出版
- 白井 大介(2005). 自己愛と自己対象体験:「自己対象体験」尺度作成の試み(1). 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 14, 153-154.
- 関 知恵子(1982). 人格適応面からみた依存性の研究——自己像との関連において——. 京都大学教育学部心理教育相談室臨床心理事例研究, 9, 7-16.
- 玉瀬 耕治・相原 和雄(2005). 相互依存的甘えと思いやり, 屈折した甘えと自己愛傾向. 奈良教育大学紀要, 54(1), 49-61.